

ホースエリ日記
ランニのお供

ぶんたながえり
えやまもとみなこ



目 次

桜散る日の決意	謎の五十分	上京物語	妹	ハチ事件	尼になろうと思つた話	和菓子エッセイ	大好きで大嫌いなもの	レポート提出	父の旅	オセロ	ドキドキする話	生き仏	続・尼になろうと思つた話	二十二才
---------	-------	------	---	------	------------	---------	------------	--------	-----	-----	---------	-----	--------------	------

45 42 39 36 33 30 26 23 20 16 13 10 7 4 1



ジヤニーズパワー

里帰り

ミラクルタイム

恋の話

自滅行為

成長しない理由

はりきつて行こう！

生き仏、逝く

またまた尼になろうと思つた話

コリアに勝つた女

サーフィン話

消えた一年

たくましい彼女

遺伝に逆らった女

家族旅行

あたしの五年間

101 97 94 90 87 83 78 74 68 64 61 58 57 54 51 48



さくら

双子

ブログをはじめよう

黒猫

つぶやき

出会い

秘密

秘密の続編

警察沙汰

旅猿 石垣島編

太郎と花子

ゆすりたかり

雨漏りつづき

人生最大の不幸

一日天下

146 144 140 138 135 133 131 128 124 121 119 117 114 113 108 105



旅 北海道編

マブダチ

しゅうへい

変貌

血液型

目からウロコ

うんこ号

スー君星になる

旅 台湾編

ユウイチとプチトマト

オセロ続編

やまもとみなこ

探偵

二十周年

*

プロフィール

189 185 181 177 174 172 168 166 164 162 160 157 154 150



桜散る日の決意

ある日突然、私は物書きになろうと思つた。才能はないけど。

私はこの春短大を卒業し、時代の流れに沿つて就職浪人となつた。始めから就職する気がなかつたので仕方ない。

「なるようしかならん」そんな言葉を心の友とし、いつそ尼になろうか、いや、屋形船の女船頭というのはどうだ。待てよ、探偵というのも捨てがたい。とまあ結構幅広い職業を候補に上げていた。そんなある日、私は独りで公園を散歩していた。

雨が降つた後で、散りかけの桜は一気に落ちてしまい、道は一面の桜色だった。

（なんて風流な景色だ。それにしても真つ昼間に私何してるんだろう。）

そんなことを考えながらボーッとしていると、ふいに、物書きにならねばという思いが頭を駆け巡つた。これは大変！何かのお告げに違ひない。思い込みの激しい私はその日の散歩をすぐに終えた。

かつて私は童話作家を目指したことがある。数々の募集に、友人に絵まで描かせ毎年応募した。日産の童話大賞、アンデルセンのメルヘン大賞などは常連だ。

しかし、かすりもしない。人間諦めが肝心。

またある時私はミステリー作家になろうと思つた。しかしこれは規定の原稿用紙数にすらなかなか到達しない。しかも序盤から犯人がバレバレである。応募する前に諦めた。

そうなのだ、私には創造する才能がないのだ。ならば造らなくていいものを書けばいい。事実、経験、思考、それはズ・イ・ヒ・ツ。どうしてこんな簡単なことに気付かなかつたのだろう。

改めて、私は頭が良くない。

高校までの学業は短大の二年間ですべて忘れてしまつた。でもたまには頭の悪そうなエッセイストがいてもいいじゃないか。知的エッセイストばかりじゃ面白味がないつてものよ。ついては早速どんどん書くぞ！そしていつか誰かに読んでもらおう。たくさん書いて、人生経験を積んで、いつか金持ちになつた時、自費出版してやる。よし、調子に乗ってきた。

金持ちになるということ自体にも不安が残るが、気にしない気にしない。
私の野望は広がる一方だ。



謎の五十分

新聞勧誘の人って、どう鍛えたらあのしつこさを身に付けられるのだろう。赤の他人に、やけに馴れ馴れしく、それでいて礼儀を見せるのは難しいことだ。

また私は捕まつた。某新聞社のその勧誘員は戸を開けるまで名乗り方が怪しい。

「恐れ入ります。：です。」三度聞き直したがわからなかつた。

「決して怪しいものではありません。」

ということ 자체かなり怪しさを物語つていてる。

ドアを開けるとそこには満面の笑みで、

「〇〇新聞です！」と、実にかつ舌のよい三十才くらいの男が立つていた。

新聞と言うものは素晴らしい。あんなに知識と教養に溢れ、最新情報満載で、いろんなジャンルに



精通している読み物はない。しかも毎朝早くから配達してくれる手間を思えば、月三千円ちょっとなんて安いもんだ。

しかし、それと今契約するかどうかは話が違う。今の私にとつて新聞は必要不可欠なものではないからだ。所詮フリーーターの身、悠長に新聞を読む暇はないはず。（況やこんなものを書いている暇はない。）

大体のニュースはテレビでわかるし、ひとまず今のわたしには必要ない。

しかし男はやつてきた。

始めは面倒だつたので、他の新聞を取つていると言つたが、なにしろしつこい。
詳しく聞くので答えに困り、「うそです。」と白状した。

今までの勧誘員こそ、ドアも開けずに応対したものだが、男には不覚にも開けさせられたといふことで対抗心が芽生えた気がする。

次は「もうすぐ引っ越すんです。」と言つてみた。

すると「いつ？どこへですか？どうしてですか？それまででいいんです！」
とものすごい速さで聞き返す。これにも弱つて「それもうそです。」と答えた。
悔しいので、今度は同居人がいるので一人じゃ決められないと言つてみた。これは本当。「何でも相談しないと彼女怖いし……。」